

「余滴」

西新潟中央病院
服部 正治

私が在住している新潟県上越市は今ホットです。それはNHKの大河ドラマの「天地人」の舞台になっているところだからです。上杉謙信の居城だった春日山城は自宅から20分ほどのところにありますが、今は観光客で大変に賑わっています。また上越市には日本三大夜桜で有名な(?)高田公園があり、4月の上旬から中旬にかけて「百万人観桜会」が開催されました。これまでは実際に来場者が百万人を越えたことはなかったようですが、今年はETC搭載車休日割引の影響と上記の大河ドラマの舞台となったことも重なって実際に来場者百万人を越えたと聞いております。まさにマスコミの影響はすごいと感じたことです。

上越市は30年ほど前に隣接市だった高田市と直江津市が合併してできた街です。近年は少雪化の傾向にありますが、冬場は大変な雪が降るところです。特に高田地区は2-3mくらいの雪が当たり前に降るところでした。私が住んでいる直江津地区でも例年1mくらいは降るのが普通でした。昭和60年前後の話になります。12月中旬頃から大雪となりましたが、当時はまだ木造の結核病棟が残っており屋根に1mくらい雪が積もると、建物がつぶれる恐れがあって職員総出で雪下ろしにあたりました。しかし都市部の施設は別として田舎にある国立病院・療養所はとにかく敷地が広いという特徴があります。1棟の雪下ろしが終わってもまた別の棟の雪下ろしが待っています。来る日も来る日も雪下ろしに追われ、12月28日の仕事納めの日まで雪と格闘していたことが思い出として残っています。

勤務していた当時のその施設で、精神科の作業療法を担当していました。その頃は500坪(?)程度の畑を耕し患者さんとともに四季折々の野菜を育てる農耕作業グループ、電機部品の組み立てや造花作

業などのいわゆる内職作業グループ、縫い物や編み物をする縫製グループ、施設内の植物の手入れをする園芸作業のグループ、手工芸主体の工作グループなどがあり、作業療法士だけでなく看護師や作業手の方々と一緒に仕事をさせていただきました。各病棟から毎日90人ほどの参加者があり、活気に満ちあふれていた時期だったように思います。その当時は院長をはじめとして精神科のリハビリテーションに施設をあげて取り組んでいた時期であり、全国的にも4番目に創立されたりハビリテーション学院が併設されたりと施設内でのリハビリテーションが活発に行われた時期でした。今も懐かしく当時のことが思い出されます。

その当時から30年近く年月が経過しましたが、精神科医療に対する批判、作業療法による入院の長期化批判、慢性期患者の脱入院化、医療観察法の施行、など様々な精神科医療の流れがあり随分と当時から様変わりしてきた感があります。以前はいかに病棟の開放化を進め人道的に患者を処遇するか、患者の生活能力・就労能力を高めることで退院を促進するかに力点が置かれていたように思います。現在は、急性期医療へのシフト、入院期間の短期化、慢性期患者の退院後サポートシステム構築による再入院率の削減、精神障害者による犯罪の発生・再発防止、というところに力点が置かれてきているのでしょうか。その影響もあってか作業療法の対象者も慢性期主体から亜急性期主体に変化してきている観があります。今現在は、精神科とは離れた分野で仕事をしておりますが、私の作業療法士としての原点は精神科にあり、今も一番に関心のあるところでもあります。今後もこれからの精神科医療の流れに関心を持ちつつどんな風に変遷していくか、私なりに見守っていきたくて考えています。